
北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

館脇 操先生小伝 抜粋特別号

(ボランティアニュース No. 42~44 号から抜粋)

第1回	ボランティア ニュース No. 42	2016. 09	-----	1
第2回	ボランティア ニュース No. 43	2016. 12	-----	4
第3回	ボランティア ニュース No. 44	2017. 03	-----	8
	館脇 操先生の思い出 (小島 覚様寄稿)		-----	12

特別寄稿

館脇 操先生小伝 (第1回)

北海道大学名誉教授 五十嵐 恒夫 (農学部林学科 1955 年卒業)

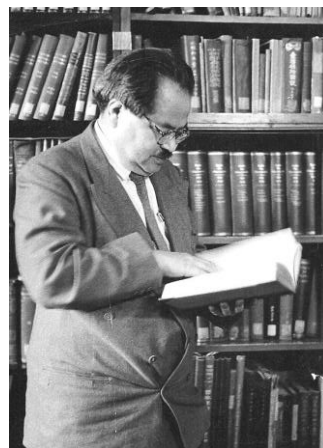
1. 出身地と大学でのポスト

館脇先生は、1899 (明治 32) 年 9 月 8 日横浜に生まれ、1976 (昭和 51) 年 7 月 18 日、入院中の病院で心不全のため逝去された。享年 77 歳であった。

先生は 1918 (大正 7) 年神奈川県立横浜第一中学校を卒業した。中学時代、当時東京帝国大学におられた牧野富太郎先生が毎月横浜植物学会に来ていたことが、先生が植物学に興味をもつ一因であったのかも知れない。

1918 年 (この年、北大は東北帝国大学農科大学から北海道帝国大学農科大学となった。以下では北海道大学という)、北海道大学予科入学により先生の札幌での生活が始まり、クラブは陸上競技部に在籍したようである。植物に興味を持っていたことから学部は農学部に進み、植物学教室の宮部金吾教授に師事した。当時は植物標本庫も植物教室の所有であり、主に宮部教授が収集された豊富な標本が収蔵されており、館脇先生にとっては研究材料に恵まれた環境にあったと言える。昭和 27、8 年頃に植物学教室で宮部先生の記念行事があり、フィルムの上映もあったが、若き日の館脇先生が標本庫から標本を採り出し、捧げ持つように宮部先生のもとに運ぶ場面が記録されている。

先生は、1924 (大正 13) 年、農学部農業生物学



館脇 操先生
北大農学部研究室にて、昭和 34 年 6 月

科を卒業、直ちに農学実科講師となり、1926 年には農学部講師、1935 (昭和 10) 年農学部助教授、1952 (昭和 27) 年農学部教授になられ、1963 (昭和 38) 年、定年により退職された。この間、1956 (昭和 33) 年から定年までの 5 年間、植物園長を兼務された。北大退職後は、酪農学園大学、札幌学院大学の教授として勤務された。先生は、講師時代 11 年、助教授時代 17 年、教授時代 11 年で、北大勤務の 72% の年月が講師・助教授時代であり、いわゆる万年助教授の状態であった。宮部先生の教授時代に植物分類学を中心とした講座の新設がなぜできなかったのか不思議なことである。

2. 植物園長としての先生

北海道大学植物園は、先生の恩師宮部金吾先生が現在地に作られたものである。館脇先生は1956年から定年までの5年間、第4代目の園長を務められた。園地の片隅にあった園長官舎に居を移され、戦後の荒廃からの復興に尽力された。

私が館脇教室を離れたのち、先生からは「君が調査に出かけるときは頼みたいこともあると思うので、事前に知らせてくれ」と言われていた。五葉松の重大病害を引き起こす病原菌の中間寄主植物が灌木のスグリ類であり、道内の病理研究者5名がスグリの発病状況を調査することになった。私の調査担当地区は阿寒、十勝、網走、礼文島となり、阿寒・十勝地区に出かけることを館脇先生にお話した。先生は、「十勝に行ったら植物園のスグリが駄目になっているので、採取してきて欲しい」とのことであった。

スグリ採取後の輸送方法が確立されているのを知り、半信半疑であった。当時、札幌鉄道管理局の幹部の方の名前を荷札に書き、国鉄のどの駅でもいいから駅員に渡すようにというものであった。幹部の方は、荷物が届くと館脇先生に電話連絡をするという仕組みが作られていた。

指示にしたがい、蔓状に伸びたトカチスグリとエゾスグリを採取し、径50cmほどの輪にまとめ、根元にミズゴケを巻き付けてビニールで覆った。これに幹部の方の名前を書いた荷札をつけ、たしか幾寅駅に持ち込み駅員に輸送を依頼した。帰学後確かめると、スグリにはなんの事故もなく無事に植物園に届いていた。

先生は1960年頃、植物園長時代に種子交換のルートを作ったヨーロッパの研究機関からなにか少量のライラックの種子7種をもって見えた。当時、私は演習林研究部の実験苗畑の主任を兼務していたが、「木本植物の苗木造りは、植物園より君の所の方がうまいと思うので、苗木を作って植物園に渡してくれないか」とのことであった。当時は、技術職員に定年制がなく、70半ばを過ぎた大ベテランの職員がおり、3年ほどで30cmを超える苗木に仕立て、植物園に移管したことがある。

3. 館脇先生の思い出

以下では、先生のお人柄を示すものとして私（五十嵐）の思い出を述べる。

先生との出会い

私は中学生時代（札幌第一中学校）、植物に興味をもちポプラ会という生物部に所属し主として藻岩山で植物の観察と採集に明け暮れていた。私の父成八（ジョウハチ）は、若いころ旭川の小学校につとめていたが、植物に興味を持ち大正時代に大雪山の高山植物も採集し、不明種は北大の宮部金吾先生に見てもらっていたようである。当時、大雪山高根が原で採集したクモイリンドウは宮部・工藤両先生により、新種として発表され、*Gentiana igarashii* Miyabe et Kudo として種名にイガラシがつけられている。

私が採集した植物標本は、はじめのうちは父が見てくれていたが、そのうちに北大の館脇君に見てもらったらどうか、と言って紹介状を書いてくれた。館脇先生を君よばわりする父にびっくりしたが、父が宮部先生に教えを乞うていた頃は、館脇先生はまだ学生でもなかったわけである。やがて横浜から北大に入学した館脇先生が宮部先生門下となり父と知りあい、高山植物の研究をされたときには父が実生で育てていた高山植物を研究材料として提供したようである。

父の紹介状と標本をもってアポイントメントもとらずに北大の研究室を訪ねたのですが、紹介状を読んだ先生は、「君が成八さんの息子さんか」と感嘆され、丁寧に標本を見、いつでも聞きにおいでとイガクリ頭でいかつい体つきの先生にやさしく言われたのが、先生との出会いであった。

教師としての先生

講義 私は、2年生の秋に植物学汎論の講義をうけた。農学部に進学した2年生が対象の講義であり、あまり休講もなく、後半には自著の「樹木の形態」をテキストにした体系的な講義であった。林学科4年の時は、森林生態学の講義をうけたが、時期が前期（4月から9月）のせいもあり休講の方が多かった記憶がある。したがって、体系的な講義というよりは1回読み切り型の講義で豊富な調査結果に基づく講義は学生には大変魅力のあるものであった。

成績の評価は面談で、個々の学生の自然観、学生の学問に対する姿勢などで評価されていたようである。林学科から私を含めて3人の学生が卒業論文研究のため先生に弟子入りしたが、成績評価の面談の時は、君たちは来なくていいよと免除された。

卒業論文の指導 私は、1954年4月卒業論文の指導を林学科ではなく植物学教室の館脇先生にお願いした。先生は北限地帯ブナ林の総合的な研究を構想しておられ、もっとも整ったブナ林が大平山山麓の泊川流域にあり、函館営林局が3年前から林道を開設しながらブナの単木的伐採を開始したことを知っておられた。先生は伐採前に詳細な調査をし、記録を残すことを私に指示された。先生はこの年、文部省の短期在外研究員に選ばれ、8月からスウェーデンに出張されることになり、私は指導教官が不在になることに不安を感じた。

先生は、大平山の高山植物は見なくてよいからブナ林の調査に集中するようと言われた。かつて山本岩亀^{いわひさ}さんが、尾根依いに頂上をめざし3日目に大平山頂上の高山帯に達し植物を採集した記録があり、この苦労をさせるよりブナ林の記録をとるの考えだったのかと思う。

1954年6月に教室の助手であった三角 亨先輩と入山したところ、大平山山頂直下の沢縁に飯場ができており、付近のブナ林で伐採が始まっていた。10月までの5ヵ月間、延べ50日ほどかけ、泊川地域のブナ林の群落学的調査をベルト・トランセクト法で実施した。また、晴れた日に大平山の頂上方向を見ると、頂上付近の岩峰が見え容易に登れることがわかった。伐採後の集材路をたどっていくと、ブナ林を出ると草本群落となり頂上につながっており高山帯の植物の採集もできた。

調査を終えてからは、調査データの整理と文章化、すなわち卒業論文の作成にとりかかった。教室で公表された論文を参考に文章化に努力するも思うように作業が進まず苦勞していた。

年末に帰国された先生は、昭和天皇へのご進講の準備、渡欧中の事務処理などを終え、2月の半ば過ぎから我々に対する卒論の指導が始まった。「ワラ半

紙1~2枚でいいから書けたものをもってこい」との声がかかり、整理した資料とともに文章を持ってうかがい、つたない文章を読みあげると資料を見ながら聞いていた先生が、「君は何を言おうとしているのか」と言われ、私がこうなって、ああなっていたんですと答えると、「それならこう書けばいいじゃないかとおっしゃり、口伝されるのを私が筆記した。フィールドを見ていない先生が的確に表現されるのに驚きながらの作業を繰り返し、半月後には卒論の形が出来上がった。先生にお礼をいいながら、私の卒論か先生の論文かわからなくなりました。と申し上げると、「卒業論文というのは、人生で初めて書く論文だ。だから私はできるだけ良くなるように助言する。今後、この論文を参考に論文を書くように」とおっしゃられた。この言葉は深く私の心に刻まれ、その後学生の卒論指導に先生の考え方を応用させていただいた。

先生のエピソード

北大予科生の時は陸上部で短距離選手、本当でしょうか？伊藤誠哉先生の雅号「北洲」に倣い「蒙洲」と自称、そのため愛称はモーさん。先生を言葉で表現すると、真っ直ぐな人、暖かい人、気配りの人、探究心の旺盛な人となるのでしょうか。先生には公私にわたりお世話になった。仲人をお願いしたり、自宅の中二階を貸してもらったり、子供が入院したときにはミニカーをプレゼントしていただいたりとか、細やかな気配りをいただきました。

先生が70代半ばの冬、朝8時半に研究室の電話が鳴った。受話器を取ると先生からで、「君、いま手が空いているかい、空いていたら来てくれないかい」とのこと。研究室へ伺いますかと聞くと、自宅に来てくれとのこと。北4条西13丁目の自宅に伺うと、ドテラ姿の先生が台所のあたりでウロウロしている。「今、牛乳を温めて飲み、ガスを止めたが、止まっているか見てくれないかい」とのこと。「大丈夫です」と答え、「奥様は？」と聞くと、「ドイツに住む娘さんの所へ行った」とのことであった。

館脇 操先生小伝 (第2回)

北海道大学名誉教授 五十嵐 恒夫 (農学部林学科 1955 年卒業)

4. 先生のフィールドワークと研究

植物分布境界線

—Schmidt's Line と Miyabe's Line—

先生は、北半球の広大な地域で精力的なフィールドワークを行った。1923~24 (大正 12~13) 年、宮部教室の助教授工藤祐舜博士とともに、樺太 (現サハリン) 中部の幌内川低地帯の調査に入った。ここはロシアの地質学者シュミットが、低地帯を挟んで自生する植物種が異なると述べていたところである。詳細な調査の結果、低地帯の南西部は日本に自生する樹種が多く自生し、ササも分布するが、北東部にはササの分布はなく、山岳林はグイマツ林であることを確認し、幌内川低地帯を植物分布境界線と認め、工藤博士によりシュミット線 (Schmidt's Line) と名付けられた (図 1)

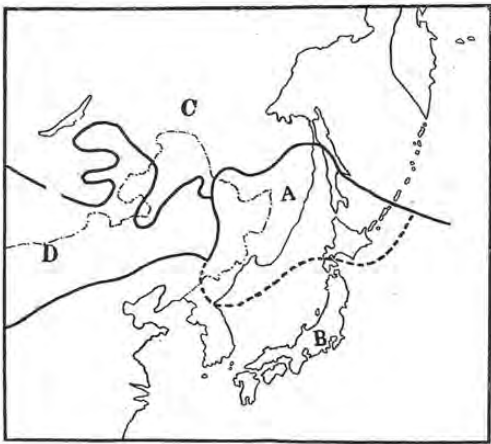


図1 東アジア北東部の植物地理学的ゾーンの区分 (Tatewaki, M., Forest ecology of the islands of the North Pacific Ocean. 北海道大学農学部紀要 50 巻, 4 号, 1958 年より)

シュミット線: サハリン中部の A と C を分ける線

宮部線: 千島列島を A と C を分ける線

A: 汎針広混交林帯 (タテワキア)

B: 東亜温帯

C: シベリア亜寒帯針葉樹林

D: 中央アジアステップ帯

館脇先生はさらに千島列島、アリューシャン列島の調査に入った。北のカムチャッカ半島から千島列島中部のウルップ島までは植物の固有種がほとんど

なく、高木種もほとんど見られないが、南隣のエトロフ島までは千島列島の南からドロノキ、ケヤマハンノキ、シラカンバ、ミズナラ、アズキナシ、エゾイタヤ、ベニイタヤなどが見られ、また針葉樹林としてはエゾマツ林、アカエゾマツ林、トドマツ林が見られる。これらの調査結果から、館脇先生は 1933 (昭和 8) 年に千島列島中部のウルップ島とエトロフ島の間に植物分布境界線があることを認め、恩師宮部金吾先生を記念し、Miyabe's Line (宮部線) と命名した (図 1)。

北アジアの調査

先生は 1937 (昭和 12) 年から 1944 (昭和 19) 年にかけて沿海州、中国東北部 (当時満州国)、黒竜江上流、大興安嶺、ホロンバイル、興安西州のステップなど、いわゆる蒙疆^{もへいきやう}をめぐる。蒙古地方の印象が大変強かったのか、自らを蒙州と号したことから愛称が蒙(もう)さんと呼ばれるようになった。

湿原、牧野林の調査

戦前、札幌近郊の幌向原野^{ほろむい}や対雁原野^{ついでかり}の泥炭地は手つかずの自然のままであった。館脇先生は鉄道で足しげく通い、「群落生態から見た石狩幌向泥炭地の植物生態」(1928) や「対雁原野植物目録」(1942) などをまとめられた。幌向の名を持つ植物を 7 種発見し、命名されている。ホロムイソウ・ホロムイソグ、ホロムイソツツジ、ホロムイリンドウ、ホロムイコウガイ、ホロムイイチゴ、ホロムイクグの 7 種である。先生の湿原に対する関心は続き、戦後は天塩のサロベツ原野へ向かった。友人の松川五郎氏 (1925 年北大農学部卒) が山形県の開拓義勇軍を連れて満州から引き揚げてきて入植したところの調査であった。

牧野林については、「北日本牧野の植物学的研究」(1943-1944) がある。かつて根釧地方の陸軍軍馬補充部が使っていた混牧林の調査がもとになったもので、ササ群落の調査から得られたデータを展開した

ものである。この場所は戦後京都大学演習林となり、足寄地方の軍馬補充部の林野は戦後九州大学演習林となっているが、先生はここでも植物目録を作成している。

森林群落調査法ベルト・トランセクト法の確立

館脇先生は1933(昭和8)年から1935(昭和10)年にかけて、北大天塩演習林で森林の群落的解析を日本で初めて手がけていた。林学科の優秀な学生(森本伝男、岩間亀三郎、内田映先輩など)の卒業論文として、ともに群落の解析とその表現方法に努力された。しかし、樹木の平面図の記録と文章による表現には限界があり、とても難解な論文であった。

1955(昭和30)年前後には、館脇教室でベルト・トランセクト法による森林解析方法が確立され、容易に森林群落の状況が理解できるようになった。1例として、女満別のヤチハンノキーミズバショウ基群集の調査結果を示すと、高木層は樹高30~33m、胸高直径32~46cmのヤチハンノキに占められ、林床はミズバショウが優占する。林木配置は図2に示す通りである。

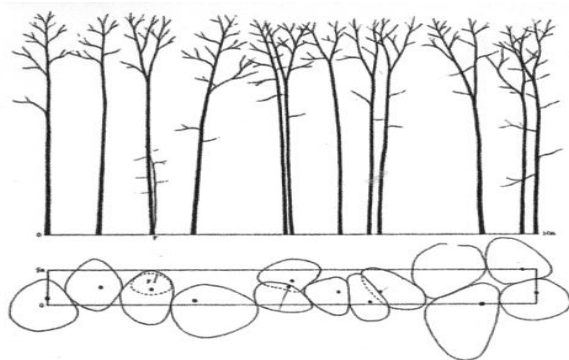


図2 帯状区ヤチハンノキーミズバショウ基群集

図2 館脇 操・遠山三樹夫・五十嵐恒夫(1967、北海道大学農学部紀要、6(2)、284-324)より

林床植物の調査は、調査ベルトの基線にそって連続した5m×5mの小方形区を設け、小方形区ごとに生存する植物それぞれの被度(林床を覆っている割合)を測定し、林床植物一覧表を作成する。平均被度5~4の植物を優占種とし、上部(高木層)の樹種と組み合わせて基群集名を与える。図2の林の群落名はヤチハンノキーミズバショウ基群集となる。

日本の森林の調査

戦後は海外調査などできる状況ではなかった。館脇先生の目は日本の森林帯に向けられた。北海道、東北、中国、四国、さらに九州は屋久島までの森林の解析が行われ、「日本森林植生図譜I~X(1956-1966)がまとめられた。この研究には多くの研究者(植物教室のスタッフに限らず、他学科、他学部、他大学、さらに林業試験場や営林局の人たち)も参加している。

「日本森林植生図譜」は10篇からなっているが、このうち4篇は北海道の森林が取り扱われている。これらのうち、2篇(IV, VI)の概要を以下に紹介する。

IV 北限地帯のブナ林の植生

館脇 操編著(1958)、164pp. 函館営林局
本篇は3章からなっている。

第1章 ブナ分布の北限帯(館脇 操)

黒松内低地帯を中心とするブナの分布とし、島牧地方、寿都半島(特に大和の沢)、歌才の天然記念物、歌棄など地方ごとにブナの分布状況を述べ、ベルト・トランセクト法による群落の解析をおこなっている。群落はブナーネマガリダケ基群集、ブナーオオカメノキーネマガリダケ基群集が見られる。

第2章 北限帯附近山岳地方のブナ林(三角 亨・河野昭一)。

狩場山(1520m)と長万部岳(972m)には、伐採されていないブナ林があり、この2山を調査地とした。

認められた群落は：

- ダケカンバーチシマザサ基群集
- ブナーチシマザサ基群集
- ブナーオオカメノキーオクヤマザサ基群集
- ブナ・ダケカンバーチシマザサ基群集
- ブナーミネカエデーオクヤマザサ基群集
- ブナーオクヤマザサ基群集
- ブナーネマガリザサ基群集

これらの群落は、狩場山では海拔450~740m、長万部岳では580~860mのブナ林に見られた。

第3章 西島牧泊川流域のブナ林 (館脇 操・五十嵐恒夫・渡辺定元)。

この地域は大平山 (1190.6m) を主峰とし、西側を南から北に向かって流れる泊川があり、地形はやや急峻である。樹木の分布は、海拔 900m まで純度の高いブナ林で覆われ、貧弱なダケカンバを挟みハイマツ林に移行する。大平山は石灰岩からなる山で、頂上から連なる岩峰には崩壊部が多く、これらの地ではブナの上界限界は 500m まで下降する。ブナ林に混交する樹種は、部分的に河畔近くでエゾイタヤ林、岩石崩壊地でヒメヤシャブシ林がある。ウダイカンバ、サワシバ、ミズナラ、オヒョウ、ホウノキ、アズキナシ、ナナカマド、ハリギリなどは単木的に混交する。日本海側の高山で見られる広葉樹林とダケカンバ林との間に針葉樹林帯を欠く現象は、本山でも同様であった。

ブナ林でみられた群落は：

- ブナーオオカメノキ基群集
- ブナーオオカメノキークヤマザサ基群集
- ブナーオオカメノキークハイヌガヤ基群集
- ブナーシラネワラビ基群集
- ブナーチシマザサ基群集
- ブナーホツツジ基群集
- ブナームラサキヤシオツツジ基群集
- ブナーヒメヤシャブシ基群集
- ブナーオオブキ基群集

上部の草原や岩峰には、オオヒラウスユキソウ、エゾムラサキモメンヅル、チシマリンドウなど 32 種類が注目すべき植物種としてリストアップされ、調査区域全体の植物種として 379 種が記載されている。

VI オホーツク沿岸の落葉広葉樹林植生

館脇 操編著 (1961)、96pp. 北見営林局

網走湖畔、能取半島、浜小清水、止別、常呂の各地で、1954～1959 年にかけて行われた調査結果が取りまとめられた論文である。

網走湖畔では、女満別、呼人西南部、呼人半島西岸、呼人半島東岸で調査され、対象となった森林はヤチハンノキ林、ヤチダモ林、ヤチハンノキ・ヤチダモ林、ナガバヤナギ林、ドロノキ林、ハルニレ林、ミズナラ林、ヤチダモ林、ヤチハンノキ林である。

ヤチハンノキ林で解析された群落は：

- ヤチハンノキークミズバショウ基群集
- ヤチハンノキークエゾイラクサ基群集
- ヤチハンノキークオオバナノエンレイソウ基群集
- ヤチハンノキークスゲ基群集

ヤチダモ林の群落としては：

- ヤチダモークミズバショウ基群集
- ヤチダモークオニシモツケ基群集
- ヤチダモークエゾイラクサ基群集
- ヤチダモークエゾイラクサ基群集
- ヤチダモーククサソテツ基群集
- ヤチダモークオオバナノエンレイソウ基群集

ヤチハンノキ・ヤチダモ林では：

- ヤチハンノキ・ヤチダモークミズバショウ基群集

ナガバヤナギ林では

- ナガバヤナギークヨシ基群集
- ナガバヤナギークエゾオオハコベ基群集
- ナガバヤナギークハマニンニク基群集

ドロノキ林では

- ドロノキークマイヅルソウ基群集

ハルニレ林では：

- ハルニレーククサソテツ基群集
- ハルニレークウスイロスゲ基群集

ミズナラ林では：

- ミズナラーククマイザサ基群集
- ミズナラークマイヅルソウ基群集

能取半島では、以下の基群集が見られた。

- エゾイタヤ・ミズナラーククマイザサ基群集
- ミズナラークエゾイタヤーククマイザサ基群集

浜小清水では、エゾノコリンゴ叢の解析を行った。網走から斜里に向かう砂丘には、随所に高さ 1～4m のエゾノコリンゴ叢がある。面積は 240～570 m²、根元の直径 4～17cm である。

止別では、砂丘に見られるカシワの自然林を解析した。樹高は 10～15m、胸高直径 34～70cm、林床にはクマイザサが優占する。部分的にはエゾヤマハギ、ススキ、アキカラマツが被度の高い所もある。群落としては、カシワーククマイザサ基群集である。

常呂では、北見市常呂町の西方から佐呂間湖付近に至る長さ約 5 km の砂丘にはオホーツク沿岸における砂丘上の代表的なカシワ林がある。魚付林として網走国立公園第 2 種特別地域となっている。渚から

砂丘に直角に幅 5mのベルトを 2 本設定し、植生状況を解析した（館脇 操・五十嵐）。カシワは、渚から 40m はなれた第 1 砂丘の背後から発達し、第 2 砂丘（海拔 10m）に続いていく。この部分のカシワは顕著な風衝形をなし、樹高 1~3m、渚から奥に入るにしたがい樹高をまし、渚から 50m の第 2 砂丘の頂上にかけては 8~10m に達する。樹高が安定するのは、渚から 80m 奥に入った地点からで、樹高は 10~12m となる。林内にはエゾイタヤを少し混生し、少量のハリギリとナナカマドを生ずる。林床にはクマイザサが優占するが、マイヅルソウが多いところもある。群落としてはカシワークマイザサ基群集である。

汎針広混交林帯 (Pan mixed forest zone)

館脇先生は、1954（昭和 29）年文部省の短期在外研究者としてスウェーデンに出張した。そこでヨーロッパブナ林とヨーロッパトウヒ林の間に介在する森林が、北海道黒松内低地帯以北、サハリンのシュミット線以南、千島列島中部の宮部線以南、中国北東部~ロシア極東地区の森林と、きわめて類似することに気づいた。

- 1) 亜寒帯性針葉樹林または亜寒帯針葉樹林に属する広葉樹林が全域に存在しない。
- 2) 亜寒帯針葉樹林と温帯性広葉樹林がモザイク式配列をしている。
- 3) 混交林における亜寒帯性針葉樹種と温帯性広葉樹種がモザイク的混交をしている。
- 4) 針広混交林に特殊な広葉樹林（ハルニレーエゾイタヤ林、シナノキエゾイタヤ林、ミズナラ、サワシバなど）が存在する。
- 5) 代表的樹種の所属する属（*Quercus*, *Ulmus*, *Carpinus*, *Corylus*, *Fraxinus* など）が共通する。

以上 5 点の類似点をあげ、先生は、これらアジアの地域に見られる森林は北欧のヨーロッパブナ林とヨーロッパトウヒ林の間に介在する森林と相同（森林を構成する種、属、および形態が共通すること）のものと考え、汎針広混交林と名付けた（北方林業, 1955-1957）。

タテワキアの提唱

長年にわたる森林研究の集大成として、1958 年先生は「北太平洋諸島の森林生態学研究」を公表された。また、上に述べた北海道黒松内以北、樺太シュミット線以南、千島列島エトロフ島以南、中国北東部~ロシア極東地区に囲まれた地域に対し、植物区系として「タテワキア」と呼ぶことを提唱した（図 1）。



演習林作業員たちとともに。
北大天塩地方演習林の湿原系アカエゾマツ林にて
1960 年 10 月 24 日（先生 61 歳）



館脇 操著 摘草百種（前編）
北方出版社 1946 より

特別寄稿

館脇 操先生小伝 (第3回、最終回)

北海道大学名誉教授 五十嵐 恒夫 (農学部林学科 1955 年卒業)

5. 館脇先生の晩年の研究生活

1966 (昭和 41) 年頃、私が森林病理の研究室に使っていた農学部の地下室 (半地下) に突然、館脇先生が訪ねてこられた。先生は「70 代の仕事として 3 つの大きいことをしたいので、協力して欲しい。君も知っていると思うが、私のいた研究室もなくなってしまい、君に頼むしかないのだ」とのことであった。

全学的には大学院環境科学研究科が創設され、農学部植物学教室にあった不完全講座の植物分類講座が助教授 1 の定員を持ってこれに参加し、名誉教授の館脇先生一人が取り残された状態となっていた。先生の言う 3 つの大きいこととは、(1) 北大天塩演習林、(2) 野幌国有林、(3) 阿寒国立公園の 3 地域の森林植生を書き上げることであった。

大学院を終了したが、定職もない状態であった私を演習林研究部の先生方が心配してくださり、天塩演習林の森林植生の調査を委託してくれていたこともあり、手足を失った状態の先生の研究を手助けすることとした。

- (1) の天塩演習林の森林植生については、「館脇操・五十嵐恒夫 (1971) 北大天塩・中川地方演習林の森林植生. 北海道大学演習林研究報告、28(1)、1-192」として公表された。
- (2) の野幌森林については、札幌営林局から支援をいただき、「館脇操・五十嵐恒夫 (1973) 北海道石狩国野幌森林の植物学的研究. 札幌営林局 355pp.」として公表された。
- (3) の阿寒国立公園については、調査の外業はほぼ終了していたが、先生が亡くなられた後、「館脇操・五十嵐恒夫 (1977) 阿寒国立公園の植生. 帯広営林局、149pp.」として公表された。

先生の阿寒に対する思い入れは大変大きいものがあり、学生時代に初めて訪れた時の印象、マリモの保護活動、昭和天皇はじめ内外の多くの研究者の案内やディスカッションなどの経過があった。

先生はいつも、論文のまえがきとあとがきはご自分で書かれていた。1975 年の 12 月下旬にまえがきを書きに阿寒に行くと言って私の研究室にみえられた。健康も心配で、私も同行を申し出たが、拒否された。やむなく旅費を作りお渡しした。お帰りになってお会いすると、「阿寒では何も書けなかったよ」と言っておられた。帯広営林局には調査費を支出してもらっており、報告書を作成したが、これは先生の意図とはかけ離れたものであらうと思われる。

6. 館脇先生の受賞

先生は長年にわたり北太平洋諸島における森林生態的研究を推進されたが、この功績が評価され、1960 年に日本農学賞が授与された。

また、先生は植物学や森林群落学の研究で培われた鋭い自然観に立ち、国立公園や国定公園の設立や景観維持あるいは阿寒湖のマリモの保護に見られるような自然保護の面にも大きく貢献された。これらの業績に対し、1949 年には北海道文化賞、1972 年には北海道新聞文化賞が授与された。



雌阿寒岳湖畔口 4 合目のトドマツ林を学術参考林に設定するための調査 (中央右の杖をもっている人が先生)
1972 年 10 月 28 日 (先生 73 歳)

7. 館協先生の逝去

先生は、1976（昭和51）年3月中旬パイロット・フォレスト総合調査の最終打ち合わせ会議の直後、体調不良のため札幌医大病院に入院された。腹部腫瘍、腎不全の診断であったが、同年7月18日午後9時に心不全のため逝去された。享年77歳であった。

奥様美代子さまのお話では、病状が少し落ち着いてからは病院の数名の看護婦さんがベットの周りに来て、一緒に讃美歌を歌っていたとのことであった。奥様は熱心なクリスチャンであられたようであるが、お元気な時の先生からは、宗教色は一切感じられなかった

葬儀は、先生の恩師宮部金吾先生が創立者の一人である札幌独立教会で行われた。1976年7月20日6時30分から棺前祈祷会、21日10時から告別式が行われた。喪主は美代子夫人、葬儀委員長は北大農学部植物教室村山大記教授が務められた。先生の死を悼み参集された参会者で、教会のメインホールや廊下は溢れていた。葬儀では、先生の略歴披露のあと時田先生の告別の辞があり、北海道大学学長、同農学部学部長、日本生態学会、日本植物学会、友人代表、門下生代表からの弔辞があった。火葬後の追想会にも多くの人が参集し、在りし日の先生を偲んだ。

8. 館協先生の思い出

以下では、先生のお人柄を示すものとして私（五十嵐）の思い出を述べる。

先生は大の甘いもの好き

先生の教室を離れた1955年5月下旬、北見営林局の新局長にその年行う管内の調査を説明するため先生は北見に出かけた。どういうわけか同行するように言われ、お伴をした。氷雨の降る寒い日であったが、仕事を終え、3時過ぎに営林局の寮についた。寮からは北見駅が見え、駅前には何か看板がみえる。ストーブで暖を取っているとき、「五十嵐君は甘いものが好きか？」と聞かれ、「嫌いではないが、なければ困るほどでもありません」と答えた。ややあって、「ここの駅前には大きいオヤキを売る店があり、とてもおいしんだよ」。少々鈍い私でも先生はオヤキを食べたいと言っていることがわかり、雨の中でかけた。通常の大きさの2倍半くらいの大きいオヤキを

5個購入し、宿にかえると「君も食べたまえ」と言って私に1個渡し、あつという間に残りの4個を平らげてしまった。

先生は美味しい料理も大好き

行きつけのお店は、札幌駅の近くにあった「北のイリエ」。一度だけ誘われてお店に行ったことがあるが、先生は作井シェフご自慢の牛タンシチューを肴に美味しそうにビールを飲んでおられた。

料理人の団体、社団法人全日本司厨士協会北海道地区本部の顧問も引き受けておられた。ヨーロッパを旅されたときなど、食堂車のメニューを持ち帰り、会合の席で披露したりされたようである。先生は1969年7月に横浜からソ連船に乗り、約3週間ソ連を旅行された。同協会機関誌に「ソ連船での船旅」と題して8頁の紀行文を載せている。その半分は船のメニューである（同協会機関誌、15(2)、1970）。先生が亡くなられた後、会報には2頁にわたる追悼文がのせられていた。これによると、協会の会合には毎回出席されていたことが書かれている（同協会機関誌、21(3)）。

先生の文章力

先生は外国の旅がおわると、それぞれの土地の印象などを文章にまとめ、北方林業などに投稿されていた。読んでいて、無駄がなく、必要な情報は網羅されていて、いつも感心しながら読ませていただいていた。あるときこのことを先生に話すと、「僕はスケッチが下手で状況を正確に残しておけない。それで文章で記録を残すことを考え、文章の練習をした」と話されたことがある。

野幌の調査の時、特徴的な植生を解説する看板を立てることになり、営林局から原稿を依頼された。原稿は関東の看板屋さんへ送られ、木材を彫り込んで制作されるとかで、大変高額であると聞かされた。看板代とは無関係であるが、限られた字数で要点を落ちなく表現することの難しさを知った。現場で先生が思いついた文案を口述するのを速記し、原稿を夜整理しておく。1~2日後には、山を歩きながら前の文章を読んでくれとなり、修正が入る。調査中はこんなくり返しで原案が練られ、最終的には全体の原稿を再確認し、原稿ができあがることとなる。

字数が少ない原稿ほど難しいことを知った。

阿寒湖のマリモ枯死問題

戦後、阿寒湖のマリモが大量に枯死する事件があった。特にマリモが多数生育するチュウルイ地区の被害が多かったようである。先生は学生を動員し、阿寒湖に船を浮かべマリモの枯死が水位の低下によることをつきとめ、北電をしかり、マリモの生息に安全な水位を順守させた。

戦争中（昭和19年）に歌才のブナ林を守った話

道南の黒松内には北限地域のブナの美林があり、昭和3（1928）年国指定の天然記念物に指定された。太平洋戦争の末期にその筋からの要請があり、歌才のブナ林を伐採する計画が進められていた。ブナ材の用途は、木製飛行機やプロペラの材料になるなどの風聞があったが、詳細は明らかにされていなかった。当時、倶知安営林区署に勤務されていた故川端功治氏（北大農学部卒）が伐採計画を担当していた。川端氏は学生時代、先生の講義を受けた教え子であった。川端氏の書かれた文章（黒松内ブナセンターだより、no. 60、1996：no. 61、1998）によると、ある日突然館脇先生が来訪され、「ブナは伐るな」、「絶対に伐らせんぞ」と大声で叫んだ。そして一気にまくしたてた要旨は「地球上の人類が、子々孫々まで永久に大切に保存しよう」と取り決めたのが天然記念物なのだ。歌才のブナはその天然記念物に指定されているのだ。だから日本人はこれを守り通す絶対の責任がある。もしもこのことがあれば、俺は世界の学者になんとお詫びしてよいか」、「ブナは絶対に伐らさんぞ」と絶叫に近い大声だったと記している。

さらに、先生は川端氏に「君は組織の身、上司の指示で行動することは承知しているが、軽挙妄動を心配して飛んできたのだ。何分の指示があるまで絶対に手を出さな！」と念を押して帰ってしまったが、数日を経ないで歌才ブナ林の伐採中止の指令があった。先生がどこにねじ込んだのか、どんな役職の方に抗議したのか、皆目不明であったと記している。このことについては、館脇先生の弟子、故辻井達一氏が先生に生前質問したことがあり、雑誌「モーリー」の生物学者評伝「館脇 操」の中で紹介している（モーリー、24、2011）。館脇先生は北部軍にの

り込んで、「天然記念物は勅令によるものだ。つまり天皇の命令で保護されていることになる。天皇の命令に反していいのか」と詰め寄り、軍も反論できず、伐採計画は撤回されたと記している。

先生の先見の明

1973（昭和48）年ころ北海道大学苫小牧演習林内を高速道路が通ることとなった。筆者は、道路公団との折衝メンバーの一人に加えられていたが、館脇先生は2度ほど経過を尋ねられた。高速道路を通さざるを得ない状況をお話しした後、先生は道路公団札幌支社を訪れ、道東自動車道のルートの説明を求めたようである。そして足寄・本別までしかルートが決まっていないことを確認された。先生は、道路公団に対し、東京の本社と北海道支社で高速道路のルート決定の担当者を集め、道東自動車道の延長先に位置する阿寒国立公園がどういうものなのか自分が案内するから、現地でディスカッションしようと申し入れた。

この計画は3～4日かけて実施され、世界的に見ても一級品の阿寒国立公園の森林景観を見せ、学術的に説明も十分に行い、このような景観を破壊してまで高速道路を通すことは世界的に見ても大きな損失であることを力説されたようである。

帰札されてからお聞きすると、天気も良かったし、阿寒の重要性は十分理解したのではないかとっておられた。

先生のこの努力が道路公団にも十分に理解されたためか、現在工事中の本別―釧路間の高速道路は阿寒国立公園から離れた海側の土地に建設されている。

委託研究の調査項目を変更した話

帯広営林局標茶営林署管内には、度重なる野火により草原化した大面積の原野があった。林野庁ではパイロット・フォレスト事業と名付け、カラマツの大面積造林地を造成した。20年経過した段階で、帯広営林局では「造成20年後の環境の変化」というテーマで総合研究の代表者を館脇先生に持ち込んできた。

当時マスコミによく出ていた女性が、パイロット・フォレストの森林の造成により流れ出す水がきれいになり、川の終点の厚岸湾では牡蠣稚貝が自然の状態を増殖するようになったと論じた。

帯広営林局ではこの問題も総合研究の1テーマとしてきた。先生は研究組織の中に、研究分野が近い国立林業試験場北海道支場長の遠藤泰造氏（北大林学科1953年卒）に入ってもらい、このテーマを担当してもらおう腹積もりでいた。しかし、遠藤氏はこれを拒否した。理由は、源流部の森からきれいな水が流れ出ても、厚岸湾との間の別寒辺牛川流域には多数の牛が放牧されており、牛は川で水を飲み、糞尿を垂れ流している。その汚れた川水が厚岸湾に流れ込んでいるので、問題の立て方が間違っている、というものであった。

遠藤氏の主張を了解した先生は、厚岸湾の漁業者を集め、座談会を開くことを営林局に提案し、いつの頃から牡蠣稚貝の自然増殖が始まったのかを聞きだした。漁業者は厚岸湾の水位が高くなってからであると話した。先生は、営林局の担当者に座談会の記録を整理させ、帯広営林局報に掲載させて総合調査の一項目の回答とした。

総合調査の事務局を担っていた私にとっては、先生の対応は大変勉強になった。

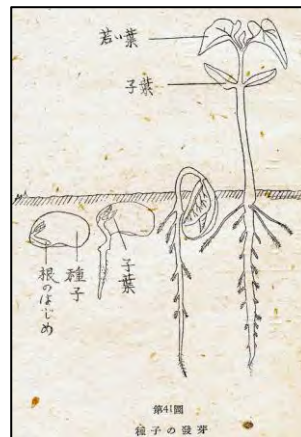
私の大学院進学

卒業論文を仕上げた頃、先生から「君も知っているとおおり、当学科出身者が引き続き私の所で勉強したいと言っているので、君の面倒は見られない」という趣旨の話があった。私は出身の林学科にもどり、森林病理学分野の研究をしたいと考えていることを話した。当時、カナダから原生的な主要樹種の森林を一定面積伐採し、樹木内部の菌類による腐朽状況を調べた論文が継続的に出されており、この分野に興味を持っていた。

こんなことがあり、館脇教室を円満退社のはずでいたが、大学院ではその後も女満別の鉄道防雪林を天然記念物にするための基礎調査を手伝って欲しいなど、時々動員がかかった。



サロマ湖東岸からオホーツク海への開口部ワッカ半島の植生調査に向かう館脇先生と手伝いの北見営林局計画課の人たち。座っている人たちの手前が先生。周りの座っている人たちは国立科学博物館の先生方。1957年7月（先生57歳）



館脇 操著 野外教室植物の学習（東京玄文社 1948）より

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース 館脇 操先生小伝 抜粋特別号

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会（編集委員：星野、今井、大山、沼田、久末、山岸）
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2017年6月
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>

館脇 操先生の思い出

小島 覚（農学部農業生物学科 1960 年卒業）

私は、昭和 30 年に福岡県にある宗像高等学校を卒業した。3 年生になり、卒業後の進路についていろいろ考えたが、実は私は、幼少時を満洲に暮らし、敗戦を北満の冊蘭屯という街で迎えた。今から思えば、想像を絶する苦難の道をたどりながらも、丸 1 年かかって日本(九州)へ引き揚げてきた。だが、九州に暮らしながらも美しい満洲の大地には無性に郷愁を感じ、できればまた満洲へ戻りたいと子供心に思っていた。

高校を卒業して大学を選ぶとき、豊かな満洲の自然の光景が脳裏を離れず、どうせ進学するなら北国へ行きたいと思っていた。当然のことがら日本で北国といえば北海道しかない。いっぽう小学校の教科書で、札幌農学校の設立に尽くしたクラーク博士のことを知り、「ボーイズ・ビー・アンビシャス」で名高い北大へぜひ行きたいと思った。

一浪ののち、さいわい昭和 31 年に北大教養部理類に入学できた。北大では、1 年半の教養課程を終えると、2 年生の後期から学部移行となる。私は、子供のころから野生植物が好きで、将来は植物の勉強をしたいと思っていた。植物を勉強するとなると理学部か農学部ということになる。そこで内容を調べてみると、理学部でできることは海藻の分類か染色体の研究ということだった。

植物とはいえ海藻にはさほど興味はなかったし、植物を潰して細胞レベルの研究にも興味はなかった。いっぽう農学部には館脇操先生という著名な植物分類・生態学の研究者がおられた。そうだ農学部へ行こう。こうして私は昭和 32 年の後期から農学部へ所属し、館脇先生のもとで植物生態学の勉強をすることになった。館脇先生の業績については五十嵐恒夫氏が本報で詳しく記述している。

館脇先生はいうまでもなく、日本列島はもとより、戦前から満洲、沿海州、千島列島、アリューシャン列島など北東太平洋アジア一帯を広く回られ、植物の分類・地理や生態を研究されていた。私が農学部へ移行した頃、館脇先生は自然相をよくとどめた日

本各地域の代表的な植生の実に精緻な記録を作られ、「日本森林植生図譜」というタイトルで研究論文として発表されていた。

私は館脇先生に連れられて「日本森林植生図譜」の調査に参加することになった。北海道各地を当時助手だった故伊藤浩司さんと歩き回り、大雪山麓や置戸や支笏湖周辺などで植生を調査し、館脇先生独特の手法であるベルト・トランセクトの設置に関わった。ベルト・トランセクトというのは、带状区とも呼ばれ、ある地域の最も特徴的あるいは代表的な植生を記録するため、通常 5~10m、長さ 30~50m の区画を設定して、その中にみられる植物をすべて記録、樹木については毎木調査を行い、さらに樹冠側面図や投影図を描いて正確な植生の記録をすることである。こうして大学の 3~4 年生の時期、その後、大学院修士課程に進学してからも、館脇先生のもとで北海道の植生調査に従事した。

その後 1967 年、縁あってカナダのブリティッシュ・コロンビア大学に進学し、同大学のクラジナー教授のもと、カナダの植生の研究を始めることとなり、以来 11 年をカナダで過ごした。1976 年 7 月、館脇先生は逝去された。その時私はカナダに在住していたため連絡を受けたのも遅く、先生のご臨終にはもちろん葬儀へ参加することも叶わなかった。ただ先生のご冥福を祈るのみだった。



館脇先生と調査メンバー(1961 年)
支笏湖畔にて、筆者は、後列右